

山名一雄

奥利根にロマンを求めて

― 学術調査概要 ―

奥利根地域学術調査隊

隊長 小林 二三雄



奥利根といっても、このたびの調査区域は一応、利根川源流地を行なった。

調査の糸口は県環境保全課から「この地域は学術的に空白地となっている」ということから自然保護の富山真係長（山岳連盟常任理事）から話があり、これを受けて自然環境調査研究会（会長堀正一群馬大学教授）が調査にかかることになったが何となく、この会員だけではとても調査ができるわけでもないでこの地域で活躍している奥利根山岳会（会長小野伊喜雄氏以下四〇名）の全面的支援を受けて実施した。

その結果については奥利根地域学術調査報告書（Ⅰ・Ⅱ）は出版しⅢは現在調査者全員で執筆中であるが、その概要はつぎのとおりである。

1. 地形・地質

奥利根地域は群馬県の北端部に位置し、三國山脈の北東端で、越後山脈の南端にある標高一〇〇〇m内外の山々が連立し、この間を深くえぐって利根川が流れてけわしい壮年地形を形づけている。

しかしながら、そのけわしい地形ではあるが一部の山麓部にはかつて存在したと思われる平坦面をなごりを残している。

また、小沢岳から大水上山までの間には一見、カール状の凹地や、その凹地の末端には氷推石と思われる一連の丘があり、凹地の下流部をまぐるしく聞いている、丹後山と大水上山の間の丹後山よりには二重尾根が見られる。

この尾根の中央部には小さいながら池もみられる。

この二重尾根は丹後山から西南の越後沢山から本谷山の稜線にかけても見られたが、これらは単なる雪食地形のみと思われず、氷雪のはたらきによつたものと思われる、今後の精査の結果がまたたいてくる。

また、越後沢付近には半円形の急崖によつてかこまれた圈谷状の谷地形がある。

これは越後沢右股に特徴的にあらわれている。この沢では標高一二〇〇m付近、一五〇〇m付近それに一七〇〇m付近によく発達し、現在、当地域に十月末まで残存の活動に開連して形成された文象

する雪溪の分布とよく一致している。この特徴的な谷地形は断面図を見るとU字形をしており、利根源流域のV字谷とは、いささかもむきを異にしている。

これらの谷地形も氷雪食地形の一種であると考えられるが、成因についてはさらに精査しなければならぬ。いずれにしても、これら奥利根地域の周水河地形はその成因をめぐって大きな課題を提供したことになる。

地質については従来から奥利根中生層と呼ばれる海成層が知られていたが、分布や構造が明らかにされてきて、下位より大利根層、オイックイ層、剣ヶ倉層、井戸沢層とし、全体を奥利根層群として一貫した。

本層群は大変複雑なおれまがつたり、たたられたっているのではつきりした厚さではないが約二〇〇m以上の厚さをもっている。

この中生層群の中には幾種類かの火成岩の活動も知られて「シツケイがマワシ」付近にはここより下流に広く分布する須田貝花崗岩の活動に開連して形成された文象

斑岩の大きな貫入岩体がある。

越後沢や小穂沢の上流部には本地域では比較的新しい新第三紀の貫入ではないかと思われる斑岩の岩株状岩体があった。

また最も新しい火成岩として水長沢山格結凝灰岩の厚い推積が知られていたが、これの延長と思われる岩体が越後沢山の西南麓にあり、かなり厚く推積している、かつては利根川の谷合もない時代に水長沢山と越後沢山西南麓はほぼ平坦面であったことを示している。この熔結凝灰岩はその岩石的特徴から約一〇〇万年前の生成と推定される。

大水上山や丹後山一帯に分布する凝灰岩礫状の岩体については従来は未詳第三系の流紋岩と考えていたが、本年の調査の結果、中之岳斑岩岩体の一部であることが確認された。

2 植物

奥利根地域の植生については片野、里見、須藤三隊員の研究によるとであるが、本流と越後沢の植生を植生によつて次のように分けている。

1、雪槽地帯

アラシグサ―カニツリノガリヤス群落を中心とする雪槽群落

2、雪槽地帯上部急傾斜地

「奥利根型ミヤマナラ群落」を中心として、ヤマモミジ低木群落、ときにマルバマンサク

3、溪流沿い垂直岩壁

ダイモンジソウ群落

4、溪流平坦地

オオイトドリ群落

5、溪流平坦地の上部急傾斜地

ヤマモミジ低木群落

6、緩傾斜地

オオバクロモジ―ブナ群落

7、岩稜地

アカミノイヌツゲ―クロベ

さらに本地域の植物相は日本海地域のものであるし、本県では日本海要素が最も多く分布する地域であり、裏日本多雪地域「羽越重区」の植物が多く分布すると述べている。また「水河期に南下した植物群も、山頂部や湿原、雪田と雪橋地帯などに残存している」と述べている。

このほか調査各隊員によつて野生動物についても多くの貴重な資料が得られ、本地域はその自然環境のすばらしさが日本列島中とくにすぐれていることを立証できたと。しかし、この調査ですべては解明できたわけではなく、奥利根の大自然は次々とその深秘な世界をのぞかせ明日へのロマンをかきたせとどまることをしらないのである。

本調査にあたり環境保全課、奥利根山岳会の各位、田中、上原、高橋、滝田、小泉、高久の各氏に大変お世話になりましたことを銘記してお礼申し上げます。

群衆、ときにマルバマンサク

昭和五二年年度

地区別指導者研修会

期日 十一月十二日―十三日

会場 栃木県古賀志山

目的 中堅指導員を中心とした指導員の資質の向上および均衡をはかるとともに、公認指導員検定会の検定員の育成ならびに指導員の研修を行う。

研修内容 第一日目に、不動の滝にて六〇分のタイヤをつるして直接確保を行う。二日目は、肩がみの懸垂下降を行い、いづれも検定基準にもとずいて行われた。

研究討議として懸垂下降の準備の際に、セルフビレーを取つてそれをザイルに通して下降を開始するが、この場合末端が結んであるので失敗した時止るが、安全性がない。その為にザイルにブルージック結びでセルフビレーをして上側の手でそれをしごきながら下降しているが、結び方によってはまったく下降出来ないということもあり、初心者には使えないのではなかという意見が出され、結論が出ませんでした。この件については日山協会で再検討をするという提案で終わりました。

感想 第一回目の谷川岳をはじめ奥多摩、古賀志山と三回目の研修会であるが、初めから通して参加出来たら良かったと思う。

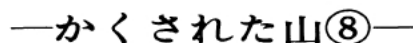
参加者は関東一ブロックの全都四県で三名、一県不参加であったが、本県からは赤石春親、阪本明子の二名であった。

文責 阪本明子

奥杉根に入山するには、車で矢木沢ダムまで送ってもらうと便利である。山道はダムの右側にそつてあるが、入山者も少ないと見えて大変に歩きづらい。ダム湖は満水時よりも六・七米は水位が下つており、湖岸では枯木が水面上に顔をのぞかせているのが、なんと神秘的である。

東千ヶ倉沢より藪の中の踏跡ぞ
いとなり、やがて左下に小穂口沢
が本流に合流するのを見る。ここ
で一氣に本流に下り、いよいよ本
流の遡行が始まる。

三十分程進むと右手から水長沢と合流する。しばらく進むと水量計があり、やがて川巾も狭くなり流れも急流となつて兩岸が、百米以上に峻立した崖壁帯がそびえている。ここが第一の難所と言われている。「シツケイガマワシ」であ増水時には、ここは半日かかりで高捲きすると聞いていたが、我々たちは快速に徒歩を繰り返し、難なく乗り越える。井戸沢までに一度、十五分程の休憩をし、これから先は難なく



利根川本流

群馬星稜山岳会

進み越後沢の出合に着く。
 ここには左右にヒバークに最適な
 台地があり、第一日はここに泊る
 のが普通とされている。

ここからは、右岸に高捲きルー
トがあり、剣ヶ倉土合まで行くこ
とが出来るが、我々はそのまま、
高捲きを行ない、踏跡のない藪の
中を黒滝沢の手前まで藪こぎをし
川床に下り立った。

黒滝沢からは快適な遡行であり滝倉には難なく着くことが出来る。これらは、最後の難所「オイックイ」である。ここは水深もだいぶあり、入って間もなくしてだいぶ深い所にさしかかる。左右の岩壁を見ても高捲きするには、高度の登攀技術を要しそうなので仕方なく無理して流れの中を進むことにした。

進むにつれて身体が徐々に水の中に入り、胸下まで水につかった。さすがに胸下まで水につかると冷たさにも身にしみ、一瞬動氣が走る。下北沢を後にした所で、流れが枯涸つてきて水温も下り、足がつかさざるように痛くなつてきて、五分も水の中に入っていられない状態となつた。

六百米程進むと初めて雪溪を見たが、その手前百米程の所に十中米程のスノーブリッツが、見る形もなく崩れていた。

先程の水の濁った冷たさは、この崩壊によるものであったのだ。まさに危機一髪であった。

始めてここでピッケルを活用する。トツが崩れた雪溪の上に足場を作り、その後を皆が続く。間もな

く右に下北沢を、左に越後コボラ
中越後沢と、いくつかの滝を見て
裏越後沢に着く。

この辺は川巾も広くなる。裏越
後沢の合流少し上の、三、四米の
滝の左側を登り、こきざみに枝沢
を左右に見ながら簡単に魚止め
の滝まで歩くことが出来た。

この滝は落差が二十五米くらいあ

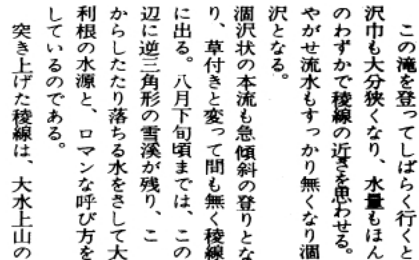
るが、滝は二条になっており途中岩にぶつかって広い滝壺一杯にしぶきを散らしている、我々は滝の左側をバランスで直登する。そして百米程進むと五米程の滝にぶつかる。これは滝壺左側をシヤワークライミングする。尚もこの上に滝とぶつかるが右側を登の間もなくして左側より丹後沢が合流する。ここは河原が広がって

丹後沢を過ぎ、この奥の滝も左側を高捲き、やがて利根川最大の

「滝「大利根滝」」にぶつかる。
ここは左側をザイルを使って直登する。落口の少し上まで登り、草木をかきわけながら踏跡を進み、再び水辺に降りる。

ここから深沢までは簡単に達す

ることが出来た。
深沢との合流点は河原も大変広々
なっている。またこの沢が利根山
最大の枝沢であり、これから先本
流の水量も急に少くなり、徒渉も
快適である。
これから先は、十米内外の滝が即
つあり、最初の三つは安全を考へ
て高捲きする。そして最後の赤沢
滝は右側の岩壁を直登する。



偏平な右肩の部分で正面に鬼岳が
せまり、その左手奥には、魚沼三
山のアルペンの山容が招呼の間に
望まれる。

下降ルートは、稜線通し左に進
み、大水上山、深沢岳、丹後山に
至り、山頂を越えてから右手に延
びる西丹後尾根を下山のものが一
般的である。

栃ノ木沢出合まで一気に下り、十
字峠を経て野中部落まで行けば、
バスが通じている。

(文責 千木良俊彦)

昭和三十八年秋に、市内の登山に興味をもつ若者達により発足した若い山岳会である。

春夏秋冬の合宿等により、會員の技術の習得と親睦を目的としてゐる。特に四十七年から三ヶ年の合宿にて、北・中・南アルプスの完全リレー縦走を成功させたことにより、若い會員に自信が植へつた。

また市中央公民館とタイアップして、子供会や市民とキャンプ・ハイキング等に積極的に参加して、地区市民と親睦を深める等、中庄い登山活動をしていることにより、近年は市外からの会員も増加している。

会員数 二十五名

事務所 伊勢崎市連取町二一五六

代表者 鈴木 米一

岳連会員特別価格にて奉仕させていただきます

ネパールの旅④

女子雪水クラフ 安中 秀子

十一月十五日。ゴキョからの帰路は往路の対岸の道をとった。レスト・ビューの裏地に出た。驚くような別世界、丘の上の飲み水にも事欠く場所に驚いた。大きなグラス、白いテーブルクロス、飛行機へ向けての遊歩道、ホテルは今尚増築中であつた。

閑散とした村、ルザ。ランチタイムの時、シェルバはためらわずに、つじじのような木々を手折つて火をつけた。こんなことをしていいのか、少し罪を意識した。ドレの村へ下りながら、石垣の内側に銀色で大きくHという字が目についた。そばにシユラフに包まれた物体が転がっている。このうす寒いのに昼寝もなかうと連れに言葉をかいたら、あれは死体だという返事が返ってきた。同じトレッカーの高度障害、いくばくか背すじが寒くなった。

十六日。ポルツェンガからモアーン峠までの登りを終ると、後はまた緩い下りだけだ。ナムチュの女は意地がわるい。

十八日。大きな川を二回程渡つてタメに近づいた。久しぶりの透き通つた流れに、心洗われる思いがした。タメは広々とした扇状地の所、ロールワリンの山々にがしりと囲まれていた。十九日。宿に荷を残し、タメゴンバ(ラマ寺院)へ行った。もつとらしい顔をして、白い布などを納めてみるが、どうも多居くさい。信仰のない者は心貧しいのかも知れない。

夕方三度目のナムチュに着いた。その夜深まつて、一種異様の気配に私は目をさまされた。人の動きが激しくなり、家屋内には血生ぐさい臭いが充満していた。闇の中でヤクの解体作業がくり広げられていた。血と水と香料を混ぜながら、自家製のソーセージが作られ、延々一時間、目をぱちぱちとあけ、じつと見入ってしまった。

二十日。昨夜のソーセージを試してみたが、とうとう言えなかった。朝食後、かのナムチュ・バザールを見に出向いた。騒然とした人波にもまれながら、米や青果物の売買されるのを見ていた。たきさんの人出だとシェルバに話しかけたら、彼は泊りがけで来る人もいるんだと教えてくれた。夕方ジョサレへ。



知に働かない自分。情に流されてきただけの自分。悶々とした心のかえりて歩きだした両端に、芽切ったばかりの作物がまぶしかった。ルクラに着いた。大勢の人がつらいて待ちをしていた。あわてて事務所へ行くと、ブッキングしてある飛行券なら仕方ないから乗せてやると言つた。もちろん飛行機が来ればの話である。長い人は今日で九日目という。何ことも天候次第なので人を恨むことはできないらしい。

二十五日。毎日空を見上げ、爆音に心おどらしても飛行機は来ない。明け方、トイレに起きて星を数えても、自分の指で足りてしまふばかり続く。手持ちの本も読まされ、自由に会話のできる人も限られている。だからと言つて、いつ来るかわからない飛行機を待つ身の上、遠くに遊びに行くこともままならない。

じつとしていることにたえられなくなつた何人かがラムサンクへ向けて歩きだした。二十七日。あきらめ半分で朝食の諸悪の困根は向こうにあるのだしかまうものかと思ひ直した。しかし、私は日本語でまくしたてたのだから、意味など通じてないかも知れない。それが不満だ。自信のなさが甘さに変つて、言葉の不自由さが腐爛に変わつて、私達にはスキが多かつた。毎日まり中が大きな山だらけなのに、又、山よりも人のつきあいに煩わされてしまった。

翼がガスを突き抜け、朝日を沿びて飛んでゆく。眼下に蛇行をくり返す川と、土色でない豊かな耕地の村々が流れていく。密閉から解かれただけで、こんなにも明るい自分がいた。

機も一機、もう一機。血を投げだして飛行場へかけ込む。百三十人程いるという待人と多くの荷物が入り乱れ、そして爆音、緊迫した瞬間が続く。八人乗りの小型機に乗り、ルクラを一番に飛び立つ。

ウルモ、ナナカマドなどの赤が、アオモリトドマツなどに対して実に美しく目にもそまるあざやかさでした。そんな中で競技が開催されました。

本年は昨年までとちがひ縦走と踏査の二種目に分けそれぞれ二日間ずつ行なわれました。種別も少年女子が増えました。評価内容は縦走競技が、体力(30点) 技術(30点) 装備(15点) 態度(10点) 観察研究(15点) について審査された。体力の審査では、公平を期すために装備重量を一チーム60kg以上として随時計量した。技術については、歩行技術の場合山の特徴として樹林帯より湿地帯ありで、変化がはげしく、それらに対応できなければならない。審査技術は、家型テントに統一され、ホイッスルを合図に3分後の整備等生活技術を審査された。装備は、必要最少限にすると規定の一チーム60kgにならず、多少の矛盾を感じながらも、食料等を余分に持つて重量を増した。装備の取扱いは、いつも自分で使用しているものが殆んどだったので問題はなかった。

青森国体報告

第32回
期日 十月二日・十月七日
場所 八甲田運峰
テーマ あすなろ国体スローガ心ゆたかに力たくましく

参加者 監督 高橋啓太郎(群馬) カモシカ 成年 田中宏(中之条) 堀米幸二(登高会) 西原一美(富士重工) 少年男子、富沢光弘(伊東) 大島仁司(高工) 町田幸男(太高) 少年女子、小山純子、茂木美津子、広田香代子(渋谷)

山岳競技会場の八甲田山は映画でも有名になりましたが、その名前の由来は八つの兜のような山々がその山懷に湛原や池沼をもつていてところから名付けられたと言われているように多数の山々をもつて構成された火山群の総称です。四季それぞれに魅力があるらしいですが、ちょうど秋の紅葉が、

踏査競技は行動(30点) 観察(40点) 所要時間(30点) について審査された。この種目は本年より新設されたもので、所定ポイントの確認を最重要点に行動記録等をこまかく審査し評価された。

競技方法としては指定された地点の状況と課題を配布された問題用紙に記入、コースにあるポイント(10ヶ所)を地図上にX印を記す。所要時間を計り、五グループに分けて点数をつける又、標準時間より遅れると減点されるが、早さばかりを競わないよう、途中何ヶ所かで歩行技術、マナー、チームワーク等をチェックされた。本年も、少年の部は男女共、関東ブロック予選がありました。来年度は成年女子が増えるのでプロック予選はよりきびしくなると思っています。

監督は、競技コースには絶対に入る事は出来ず、選手との接触はその日の競技終了後一時間だけ、幕営地で、交流が許されるだけです。表彰規定も変わり、コース別ではなく、各種別の総合の種目別上位五チームが入賞、三位までに表彰状が授与されました。本県選手は、成年男子七位、少年男子五位、少年女子三位、に入賞しました。

満足のいく決果にはもう一歩といたところでした。来年度からは成年女子が参加し、登攀競技が増える事になりますので、予選を早目に開き、強化合宿等をもつと充実したものにしたい方がよいのではないかと思います。

これから国体が得点競技へと向い、だんだんゆとりを持った、行動ができなくなると思いますが登山の本質を忘れず肝心の山を見失うことのないようにしたいものです。(高橋啓太郎)

踏査競技は行動(30点) 観察(40点) 所要時間(30点) について審査された。この種目は本年より新設されたもので、所定ポイントの確認を最重要点に行動記録等をこまかく審査し評価された。

競技方法としては指定された地点の状況と課題を配布された問題用紙に記入、コースにあるポイント(10ヶ所)を地図上にX印を記す。所要時間を計り、五グループに分けて点数をつける又、標準時間より遅れると減点されるが、早さばかりを競わないよう、途中何ヶ所かで歩行技術、マナー、チームワーク等をチェックされた。本年も、少年の部は男女共、関東ブロック予選がありました。来年度は成年女子が増えるのでプロック予選はよりきびしくなると思っています。

監督は、競技コースには絶対に入る事は出来ず、選手との接触はその日の競技終了後一時間だけ、幕営地で、交流が許されるだけです。表彰規定も変わり、コース別ではなく、各種別の総合の種目別上位五チームが入賞、三位までに表彰状が授与されました。本県選手は、成年男子七位、少年男子五位、少年女子三位、に入賞しました。

第二回海外登山

実行委員会

日時・十月十八日 午後七時半
場所・前橋市間町会館

冒頭・浜名委員長(会長)の挨拶があり、遠征の遂行には、岳連会員の全面的な協力が必要であり協力が得られるように具体化しなければならぬ。

そのためには、関係者が心して努力するようにしてもらいたい。

議事

一、経過報告

実行委員会の構成人事及び偵察隊の派遣について説明が行われた。

偵察隊は、隊長・田中成幸・隊員・宮崎 勉の二名が、十月二十日から十二月初旬までの間、登山許可の内諾を得ること、ルート及びシエルバの確保、資金調達用の物資の調査と購入などについて、ネパール国へ行くことになった。

二、事務所設置

事務所をどこに置くか検討を行なったが、県庁内・上毛新聞社などいくつかの候補があげられたが暫定的には、石井理事長宅に置くことが、理事長の好意で承認された。

事務所は次の通りです。

仮事務所・伊勢崎市中心町十八
石井スポーツ内

TEL 0280-31013

三、資金調達について

ネパールの民芸品を輸入し、販売利益を当てる、物品の選定は偵察隊に一任する。

映画会は、出来れば二回程実施したい。尚、布施委員(高体連)

から、高校生を対象に安い物品の販売を検討したい、これには全面的に協力するとの提案がされた。

偵察隊の紹介

隊長・田中成幸(登高会、副理事長)、宮崎 勉(ミヤマ、理事)の両氏が紹介され、田中隊長より挨拶があり、偵察の目的と今後の協力が要請がなされた。

尚、会議終了後、同所に於いて偵察隊の壮行会が盛大に催された。

登山協

登山実技講習会

日山協補助事業による一般登山者対象の登山実技講習会が、赤城鍋割山を中心として、十一月二・三日の一泊二日で行われた。

高体連登山部とタイアップした、高校生男女七六名と顧問・九名の参加を得て講師原田惣司氏以下



二名の指導員が受講生五・六人につき一人づつ担当して基礎技術の講習にあたった。

第一日目、赤城青年の家グラウンドに集合。開会式のと講習に入り幕営・炊事などの基本を中心にすすめられた。受講生は、通りの技術は身につけているが仕事の分担や手順でもたつく場面がみられた。また装備についての使用法は知っているが使用後の手入れや点検、山行目的に合わせた用具の選択といった面での研究不足が感じられた。夕食後こういった点やその他疑問など出あつてテントごとのミーティングが行なわれ講師の経験などを話がはずんだ。

第二日目、晴天にめぐまれ六時半から鍋割山へ向つて行動開始した。各パーティーごとに青年の家・鍋割山・荒山高原・赤芝・青年の家のコースで歩く。歩行・読図など実地講習では地図にない枝道が錯綜して現在地確認にはどのパーティーも一苦労した。しかし赤芝からシルバコンパスをたよりにヤブをかきわけて一直線に青年の家へ出ることにしたところ、各パーティーともほぼ予定通りの地点へ到着して

みごとに講習の成果を発揮した。高体連ではここの県総体にゴミの持ち帰りと炊事場では水を汲むだけで洗った切ったりしない方式をとつたので今回もそれを採用したところよく守られ、撤収後のテント地・水場とも清掃の必要がほとんどなかった。簡単なことであるが山の水場が汚れたままになっていることの多い昨今、高体生のうちにぜひ身につけてほしい基本のマナーの一つであろう。

尚、本講習会は日本船舶振興会の補助事業の一つとなっている。

参加講師・石井謙一郎、原田惣司・太田忠行・布施正昭、樋口宗平・下平昌弘・高田政美・高橋啓太郎・水野金太郎・宇田川邦司・石川忍・大沢清・伴正也、雲野嘉章・村上泰賢・大谷清

岳界通信

救助隊秋季訓練

岳連救助隊では、十月二十三日、谷川岳一ノ倉沢でV字谷に転落した遭難者と急傾斜の岩場における遭難者の訓練を実施しました。

V字谷転落者救助内容は、転落した遭難者を救助する想定でテロリアン方式の応用技術として、両岸にワイヤーロープを張つて固定し、救助者一人がケーブルカー式に遭難者の真上に行き、そこで停止後、別の一本のワイヤーロープに確保されながら下降して遭難者のいる場所まで行き救助する。そして下降したワイヤーロープ

に遭難者を固定し、救助者と遭難者の二人がウインチの巻き取りにより吊り上げられてケーブルカーまで達し、ケーブルカーに固定後再びケーブルカー式によって搬出する方法である。もう一方、急傾斜の岩場における遭難者の救助訓練は、上下にワイヤーロープを張り、救助者が遭難者のいる場所へ登り、上から降りてきたケーブルカーにセッティングされた別のワイヤーロープに遭難者を固定し、上下に張つてあるワイヤーロープをさらにピンと張つて遭難者を吊り下げて下降させて救助する張り込み方式である。

高体連行事から

実技講習会(別稿)に参加のものは、しばらく行事はありませんでした。ただ、今年は隔年発行予定の高体連登山部報第四号発刊の年度にあつており、編集委員も決まり、原稿もばつばつ集つております。登山部も結成以来三〇年を迎え、その歩みを一つの特集として組みました。

冬山合宿検討会

例年実施されている、冬山合宿検討会が、昨年末の九日深夜協会の館に於いて実施されました。

今冬の合宿計画を持つ団体計画山行グループが、アルプスを中心に入山することになりました。

昨年は、残念ながら二件二名の遭難事故が発生してしまい、この内容について検討がなされ、入山者は参考として充分注意し同じケースの事故を起こさないよう呼びかけが行なわれた。

また昨年度と最新の情報について交換が行なわれ、これについて検討と分析がなされ、遭難防止に対する対策が協議された。

各会の成功と、無事に帰って来ることを祈る

偵察隊速報

(遭対部)

会報が発行される一月中旬には速報より具体的な内容について、全日本登山大会

十二月初旬に帰着した偵察隊二名、田中成幸隊長・宮崎勉隊員等は、一ヶ月半に及ぶ、ネパール国内に於ける登山許可の交渉と調査偵察山行を行つて来ましたが当初予定した「ギヤチユンカン峰」がついに許可が得られず、第三目的の「ダウラギリI峰」について三週間に及ぶ交渉の結果、ようやく許可を受けることが出来た。ダウラギリI峰は、同時期にフランス隊が許可を取っているため難行し、ルートを変更することで、どうにか申請が受理されました。

また雑貨の買付けを行ない、資金調達に一役買うことになりました。これは岳連会員や、一般の人達に協力頂いて買つて置き、マージンを稼ぐことに成りますので協力下さるようお願い致します。

偵察山行も行なってきましたが前回のダウラギリVI峰と同方向なので経験が生かせそうです。

いずれにせよ、頗る言葉も違う人達との交渉や、生活は隊員にとって貴重な経験となつたようです。大変ご苦労様でした。

岳連行事予定

一月 定例理事会

冬山合宿反省会(下旬)

新年会(下旬)

水雪技術講習会

五日(日) 松本沢

救助隊員公募

三月 救助隊訓練及び結団式

全日本登山大会